私達の地球を少し冷やそう

第27回

幸せの国・ブータンで郵便配達 村人のために5日間かけて歩く

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 平野 喬

中国とインドに挟まれた南アジアの小国・ブータン。昨年、若き国王と美しい王妃が来日し、東日本大震災の被災地などを訪問して被災者を勇気づけてくれました。人口が70万人弱、九州より面積が小さい国からの国賓でしたが、同国が世界でただ一つの「幸福の国」で、その国づくりにまい進している若きリーダーという点でも日本人を魅了したようです。

ブータン国の収入はインドに売っている水力発電の電気、観光収入、農業・牧畜業、そして日本など外国からの援助資金が30％を占め、貧しい国と言えるでしょう。ところが「私は幸福」と感じている国民が、90％とも80％とも言われる国なのです。日本は、内閣府の調査などによると「私は幸福」と思っている人は10％程度。先進国の集まりである経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）の幸福度指数でも平均以下です。

ブータンが独裁国家で、国民が自由にものを言えないから、などと思ったら大間違いです。前国王の時代から始まった国民総幸福量（ＧＮＨ＝グロス・ナショナル・ハッピネス）を指標にした国づくりが進められ、成功を収めているのです。医療と教育は無料、民族衣装の着用、禁煙は義務化、国の宗教はチベット仏教、憲法では、美しい自然と環境は現在世代のためだけでなく将来世代の利益のためにある、と規定されるなど、国民の権利は守り、義務をしっかり果たし、国民全体の幸福量を増やそうというのです。

映像祭大賞「思いを運ぶ手紙」

そんなおとぎ話のような国からきた1本の映画を紹介します。私が事務局長をしている地球環境映像祭で大賞を取った「思いを運ぶ手紙」というブータンの郵便配達員の1年を記録したドキュメンタリーです。テンジンさんは49歳。息子が3人、娘が2人。標高３５００ｍを越えるヒマラヤ山麓のリンシ村に住み、首都・ティンプーの中央郵便局から月に一度、村への郵便物を運ぶ仕事です。首都から自宅のある村まで徒歩で5日間もかかりますが、テンジンさんはこの仕事を26年間も続けています。

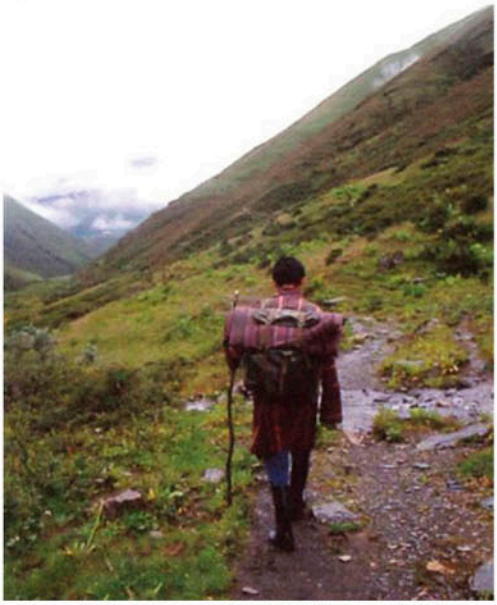
映画は厳冬期から大雨の降る夏、花が咲き誇る春とテンジンさんの足取りを追いかけますが、敬虔な仏教徒である彼は、道中、道を守る神様に花をささげ、洞窟で眠る時は「一人の時は本当に神様に励まされます」と祈りをあげます。

人口１０００人、１２０世帯の村に帰りついたテンジンさんにはまだ仕事が残っています。字が読めない村人に届いた手紙は、テンジンさんも字が読めないため、字の読める村人のところに行き、内容を聞いてから再び手紙の届け先まで足を運び口頭で内容を伝えます。

やっと辿り着いた小さな自宅で、奥さんから温かいお茶で迎えられたテンジンさんは、広い戸棚をあけて自慢します。「ここには2、3年分のお米は貯えてあります。飢饉や病気に備えて」と、砂糖や小麦粉、バターやチーズなど豊富な食べ物を見せ「すべての家が備えています」とさりげなく語っています。

テンジンさんの月収は2万6千円ほど。「とても幸せです。神のご加護とともにこの道を歩き続けます」と笑顔を見せます。

幸福とは何だろう？　と語りかける映画は、3月18日（日曜日）午後3時50分から、丸の内線・新宿御苑前の四谷区民センターで上映されます。



険しい山道を5日もかけて手紙を運ぶブータンの郵便局員（アースビジョン提供）

(財)地球・人間環境フォーラム
環境省所管の公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。